一般口演
「童謡・唱歌」にみる「防災の安全観」に関する一考察
吉 本 文 夫*・南 哲*

1. はじめに
現代の日本社会における「防災の安全観」を捉えるうえで、「童謡・唱歌」にも、繊細な感性の奥行きを有する日本人の安全に関する見方・考え方が含まれているのではないかと考えた。そこで、本調査では、「原田泰治が描く日本の童謡・唱歌100選展」を「防災」や「安全」の観点から分類・整理し、おぼろげながら見えてくる思考傾向のなかに「防災の安全観」に関する検討を試みた。

2. 調査方法
図録「原田泰治が描く日本の童謡・唱歌100選展」（2000）に掲載された「童謡・唱歌」100編を資料として、それらを「童謡・唱歌」別、「作品発表時の年号」別、「作品名から想起される季節（春夏秋冬）」別、「作品名に表れる動植物」別に分類・整理し、さらに、掲載「童謡・唱歌」100編の「１節（歌詞の一番）に表れる項目」を、「環境に関する項目」「動物に関する項目」「季節・時刻に関する項目」「天体・地形・気象に関する項目」「服飾・携帯品に関する項目」「行動・交通に関する項目」「健康（心身）状態に関する項目」別に分類・整理し、防災や安全の観点からの検討を加えた。

3. 結果及び考察
図録に掲載されている100編は、亀田製菓株式会社が設立40周年を迎えるにあたり、全国から「21世紀に残したい童謡・唱歌」を募集（応募総数21万2403通）したものをもとに、永六輔（詩人）・服部克久（作曲家）・黒柳徹子（女優）・きだまささ（歌手）・Toshi（歌手）らが選考した。その100編のイメージに相当する画面を残した原田泰治（1940）は、朝日新聞日曜版フロンページ（1982－1984年まで127回の連載）で知られるように、信州の誠訪より「日本のふる里」に赴き、スケッチやスナップを頻りに根気よくアクリル画材を塗り重ね、ごく日常の素朴な遠景・近景を祈るように表す点描法に優れている。

各時代の「発想」や「社会」等を反映した資料と考えられる「原田泰治が描く日本の童謡・唱歌100選展」の「童謡・唱歌」別は、「童謡（大正中期から昭和初期にかけて、北原白秋らが文部省唱歌を批判して作成し、運動によって普及させた子供の歌やわらべうた等）」63編、「唱歌（主として明治初期から第二次大戦終了時まで学校教育用につくられた歌、『尋常小学唱歌』等）」37編、「作品発表時の年号」別は、「明治」36編、「大正」37編、「昭和」27編となった。また、「作品名から想起される季節（春夏秋冬）」別では、「春」15編、「夏」9編、「秋」10編、「冬」7編となり、木の芽張る季節を待ちわびる想いを中心に、「二十四節気・七十二候」に通じる移ろいを観察し、その僅かな「揺らぎ」をも敏感に察知した証である。「作品名に表れる動植物」別では、「植物」9編（「紅葉」「どんぐりころころ」「茶摘」「椰子の

*関西福祉科学大学
実」「みかの花咲く丘」「さくら」「花」「からたちの花」「チューリップ」、「動物」25編（「かえなるの合唱」「赤青鶴」「めだかの学校」「蛻の光」、「鶏」「鷲のダンス」「かもめの水兵さん」「ぞうさん」「おかげ！たいさくくん」「浜千鳥」「げんこつ山のぬきさん」「どじょくふっこ」「」「蝶々」「かたつむり」「いぬのおまわりさん」「オウマ」「虫の声」「七つの子」「かわいい魚屋さん」「証城寺の狸囃子」「お猿のかごや」「かにや」「黄金虫」「うさぎとかめ」「森のくまさん」）となり、先人の身近な物事、とりわけ身近な「動物」への細やかな「観察眼」を表しておる、「動物」「植物」等を巧みに取り入れ、比較的冷静に情景を縫っている「唱歌」を子供の選々として心情中心の「童話」をともに「四季の移ろいと生ける日本人の本質」を素直に表現しているものが多い。

掲載「童話・唱歌」100編の「1節（歌詞の一番）に表れる項目」317件のうち、「環境に関する項目」は9件・17項目（「庭」3件、「かきね」「揺り籠」「のきば」「井戸」等各1件）、「動物物」別は、「動物」20件・39項目（「馬」、「鳥」各3件、「犬」、「兎」、「鷹」「鳥」「カナリア」「泥鰍」「鯖」各2件、「時鳥」「百舌鳥」「蛙」「日髪」「蜻蛉」「蛻」「蟳」「けら」等各1件）、「植物」37件・28項目（「松」「花」各4件、「桜」「楓」「菜の花」各2件、「薬」「蓮華」「茶」「蜜柑」「枳椇」「桜の花」等各1件）、「季節・時刻」別は、「季節」20件・6項目（「春」10件、「秋」5件、「夏」2件、「正月」、「八十八夜」、「五月五日」各1件）、「時刻」6件・5項目（「朝」2件、「夜」、「しぐさま」、「明日」、「百年」各1件）、「地形・気象・天体」別は、「地形」48件・18項目（「山」10件、「海」、「波」各6件、「川」4件、「野原」3件、「畑」2件、「田」「池」「牧場」「谷」「丘」「森」「里」「岸」「湖江」「沙漠」各1件、「気象」36件・17項目（「雲」6件、「空」、「風」各4件、「霧」「雷」各3件、「雨」、「天気」「霞」各2件、「雪」「霜」「霰」「吹雪」「木枯らし」「しがこ」「水」「雪れ」各1件）、「天体」9件・3項目（「日・太陽」5件、「月」、「星」各2件）、「服飾携帯品」15件・13項目（「傘」「靴」各2件、「蓑笠」「笠」の笠」「羽織」「羽織」「小田原提灯」等各1件、「行動」18件・14項目（「手」3項目、「おもちゃ」「人形」各2件、「負われて」「ダンス」「まいご」「ままごと」等各1件）、「交通」10件・9項目（「汽車」2項目、「汽車」「スピード」「鉄橋」「トンネル」「船」「自転車」「車」等各1件）、「健康（心身）」22件・20項目（「心」3件、「肩」「鎮守の神様」「天神様」「ちびす」「総」「さまみそ」「たわら」等各1件）となり、日本で生活する者の思考の一端を担っている。「環境」「動物物」「季節・時刻」「天体・地形・気象」「服飾携帯品」「行動・交通」「健康（心身）」等の縫合の中心から「童話・唱歌」を再考することは、風水害・落雷・地震・火災・交通事故及び犯罪等から身を守り、「命の大切」を身近な生活の中から、防災や安全の観点を通じて考えることを含んでいる。最近では防災科学技术が発達しているが、それでもなお、すべての災害を事前にしっかり予知することは困難である。したがって、災害が忘れた頃にやってこないように「童話・唱歌」に出会う歩に、「動物物」や「自然現象」を思い起こし、各世代間の共通理解を深めることが大切である。さらに、「平穏無事」に感謝しつつ防災や安全に関する見方・考え方を深め、災害による被害を最小限度に留めようとする努力を怠ってはならない。そして、「童話・唱歌」からも日本人の繊細な感性の奥行きを夢中になって読み取り、超高齢化が進行する現代社会における「防災」や「安全」に関する観点・考え方を深めることは、目前が既存の科学全盛の現代にこそ、より大切に扱われるべきである。

「防災」や「安全」を最優先する「気質」や「気風」を醸成する「安全文化」の創造に際し
「童謡・唱歌」にみる「防災の安全観」に関する考察

て、「故事・俗信及び説」と同様に、「童謡・唱歌」先人の身近な物事、とりわけ身近な「動物」「地形・気象」への細やかな「観察眼」を再考することは、日本で生活を営む者にとって「防災」や「安全」を考える上で、最も大切な心構え「備え」の一つである。